半開の扉―ヴィア・ラティーナ・カタコンベ墓室 F 壁画―

弘前大学 宮坂 朋
MIYASAKA Tomo

扉の表現は象徴的な意味を担う「通過」を表現するものとして、単独で、あるいは人物像を伴って、あらゆる時代あらゆる地域で表現されてきた。特に葬祭美術における扉の表現は死生観を直接的に表すものと考えられる。異教的古代からキリスト教的中世へという精神的な価値の転換期である古代末期美術における扉の表現は、研究者の関心を引く主題であったといえる。

この発表では、ローマにあるヴィア・ラティーナ・カタコンベ（以下 VLC と略記）墓室 F 壁画に表現された半分開いた扉の図像について、その源泉と 4 世紀の葬祭美術における意味について考察するものである。VLC は、しばしば「絵画館」とも称されるほど豊富で豪華な絵画装飾が施される。凝灰岩の地層を掘削されて作られた地下墓所には構造的には本来必要のない、円柱や破風、腰羽目、天井リブヴォールトなどの建築的要素が、地上の建築物を模して再現されている。精巧に作られた 13 墓室にごくわずかな人数が埋葬された贅沢な地下墓所である。壁画の主題は墓室 B（旧約聖書主題のみ）、E と N（神話主題のみ）、F(旧約聖書主題と非キリスト教主題の組み合わせ)、I と O（非キリスト教主題とキリスト教主題の組み合わせ）であり、通常のカタコンベと大きく異なる。中でも、墓室 F に描かれた二面の「半開の扉」場面は、他のカタコンベ壁画に類例がなく、論議を呼んできた。

カタコンベ壁画の様式については古くからポンペイ第四様式の延長にあるものとして理解されてきた。しかし、この VLC の壁画については、4 世紀の様式である、いわゆる「赤－緑様式」の線条による解体した建築表現から逸脱した部分が広範に認められる。VLC 壁画に顕著な建築再現表現を、エトルリアとローマの扉・門表現の系譜の中に位置づけることが有効なのではないだろうか。すでにエトルリアの骨壷と比較されているが、より広範に古イタリアの伝統上のローマの墓室壁画、骨壷・石棺浮彫に現れた扉表現との比較を行うことによって、VLC 壁画の復古趣味が明らかになるだろう。ことさら復古的趣味を強調することは、最後までキリスト教に改宗することを拒んだ 4 世紀後半の元老院階級の墓室装飾にとってはむしろ当然のことであった。

そもそもヤヌスというのはローマ独自の扉の神であって、扉の表現は普遍的であると同時に、ローマ人には特殊な意味を持つものであったことを忘れてはならないだろう。このような扉表現と旧約聖書主題のみを組み合わせた意図についても明らかにしたい。